

グローバル化と越境文学、そしてニューカマー作家の登場

－崔洋一監督『月はどっちに出ている』（1993）を手がかりに－

丁 貴連・鈴木 アリサ¹

はじめに代えて：多文化社会の到来を予告した映画

1. 崔洋一『月はどっちに出ている』（1993）の衝撃

在日韓国・朝鮮人作家、梁石日氏の小説『タクシー狂躁曲』（筑摩書房、1987年）を原作として、1993年、同じく在日2世の崔洋一監督が手がけた映画『月はどっちに出ている』（シネカノン）が公開された。それまでの在日韓国・朝鮮人文学（以下在日文学）といえば、祖国への思いや差別など、いわゆる「不幸²」が多く描かれてきたのだが、崔洋一監督は梁石日氏の原作が「日常的に感じている本音をさらけ出した³」物語として、従来の在日文学の枠組みを打ち破ったと語る⁴。

原作の小説は80年代の新宿を舞台に日本の最下層を生きる在日韓国・朝鮮人を映し出していた一方で、リメイクされた映画は90年代の新宿を舞台に、外国人が急増していた当時の時代背景に合わせてオールドカマーだけでなく、ニューカマーの登場人物も新たに追加された。崔洋一監督は「沢山の現在を語りたかった⁵」と語るように、原作とはだいぶ異なり、すでに多文化に染まりつつあった当時の日本社会が描かれ、山根貞男氏は「今までの日本映画にはないもの⁶」と評価している。公開当時東京と大阪のふたつの劇場でしか上映されていなかった本作は⁷、日本映画界に衝撃を与え、第67回キネマ旬報ベストテンの第1位に輝いたのをはじめとして、第6回日刊スポーツ映画大賞監督賞、そして第17回日本アカデミー賞優秀作品賞含む6部門受賞、など各映画賞を総なめにした⁸。

1994年には全国各地で上映され⁹、評論家だけでなく、多くの観客に届けられる作品となった。以下は『月はどっちに出ている』のあらすじである。

物語の主人公、姜忠男は在日韓国・朝鮮人のタクシードライバーだ。タクシー会社では忠男の同胞もいれば、中卒の日本人、不法滞在のイラン人などが働いている。忠男の母、英順は新宿でフィリピンパブ

を経営している。パブでは10代から20代までの若いフィリピン人女性が働いており、忠男はそのうちの一人、コニーを口説く。

周りの人にまつわる些細な事件事故も絶えないが、ある日、イラン人運転手の同僚、ハッサンが不法滞在であることが発覚し、警察に捕まってしまう。

また、母の英順は息子の忠男とコニーが付き合うことを快く思っておらず、コニーを別の勤務先へと売り飛ばしたことで、コニーと忠男はいったん別れたものの、その後思いを改めた忠男はコニーを連れ戻しに行き、タクシーに乗ったふたりの姿を映して物語は幕を閉じる。

このように、本作では90年代の日本社会を映し出しており、東京で働くオールドカマーとニューカマーが登場する。しかし、映画に登場した「外国人」が新鮮だったのではなく、彼らを「普通の人と普通の社会¹⁰」として描き、決して美化したり、逆に大袈裟にネガティブには描かなかったため、在日韓国・朝鮮人や日本人の目に新しく映った。脚本を手がけた鄭義信氏は、祖国にこだわらず自由に生きる在日2世の主人公について以下のように説明する。

この映画でも「こんなチャランポランな在日はいない」って怒る人もいると思うけど、僕たちはちゃんと実在の人物に取材してますからね¹¹

すなわち、従来の在日文学などに表れた「在日像」ではなく、映画では当時の社会を生きる在日韓国・朝鮮人の姿を映し出すことで、在日社会にも、日本人にも衝撃を与えたのだ。前述したように、原作も80年代の在日韓国・朝鮮人の姿を赤裸々に描いていたが、原作から十数年過ぎた90年代は、さらに時代が変わり、在日韓国・朝鮮人も日本人と同じく「受け入れ側」の立場になっていることを伝えている。

タクシー運転手、パブを経営する在日韓国・朝鮮

人、そこで働くフィリピン人女性、不法滞在しながら働くイラン人など、東京の底辺に生きるさまざまな外国人を、本作では面白おかしく映し出し、当時劇場内には笑いが満ちていた¹²。

そして単に笑って終わりなのではなく、観客は、話に登場した人物が映画だけの話ではないということに気が付く。例えばヒロインのコニーは15歳の時に出稼ぎという目的で来日し、大阪訛りの日本語を喋る23歳の女性であるが、当時東南アジアから出稼ぎにきた女性たちの多くは、「ジャパゆきさん」と呼ばれたエンターテイナーを職業として選んでおり、この時期に急増していたフィリピンからのニューカマーは男女ともに20歳から34歳の間の若者が多く¹³、若い女性の多くがエンターテイナーとして働いており⁴、コニーもその一人であるということが分かる。

本作は、もはや日本社会が今までとは全く違う新しい時代に突入していることを可視化したわけだが、なぜこれほどにも注目を集めたのか、日本社会に何を伝えたのかについて、詳しく見ていく。

2. オールドカマーとニューカマー

2-1 英順とコニー

映画ではオールドカマーとニューカマーの姿が対照的に映される。例えば、主人公忠男の母、英順は、在日韓国・朝鮮人1世として日本に生き、フィリピンパブを経営しながら、北朝鮮にいる家族に仕送りをしている。英順が生き延びた時代というのは、ニューカマーが来るずっと前の、在日韓国・朝鮮人に対する差別がもっとあからさまだった時代である。映画の原作、梁石日氏の『タクシー狂躁曲』(1987年)も、在日に対する深刻な差別が赤裸々に描かれており、通名を使うなど、自己主張ができずに身を潜めてしか生き延びることができなかった様子が映し出されている。映画の英順もその時代を経験している人間だ。

英順は雇用しているフィリピン人女性たちに以下のように話す。

英順：日本に来たら日本スタイルに馴染んで、
訳して!

コニー：日本人と同じようにせこせこやれって

コニー：だってフィリピン人なんだもん

(中略)

英順：あたしは、あんたたちの手本だよ。あたしの言うこと聞いてりゃ間違いない。
コニー、訳して!

(『月はどっちに出ている』劇中、下線は筆者)

「日本に来たら日本スタイルに馴染んで」という彼女の言葉は、そうするしか生き延びることができなかった人生を物語っているが、「だってフィリピン人なんだもん」とフィリピン人らしさを失わずに堂々と生きるコニーは、1980年代から登場した、来日目的がはっきりとしている「ニューカマー」の象徴として映る。



【図 1¹⁵】 営業前のフィリピンパブにてフィリピン人女性たち(左)に説教をする英順(左)

90年代よりも差別がより酷かった時代を生き延びた英順には、日本で外国人として生きていく術が備わっている。しかし、日本スタイルに馴染まずに、堂々と生きるニューカマーの登場に、英順は戸惑いを隠せない。

英順は自分なりの日本での生き方を同じ外国人である彼女たちに伝授しようとするものの、事情も目的も全く異なる彼女たちは聞く耳を持たない。

英順：もっと大局に立って、身を粉にして働くのよ(中略)

コニー：そんなこと言われても、うちら、ただの出稼ぎでっさかい

英順：東南アジアの女はだからダメなのよ。
フィリピン人、タイ人、マレーシア人、台湾人、中国。中国人は1番信用できない

コニー：朝鮮は東南アジアと違いますの?

英順：朝鮮は東アジアよ

(『月はどっちに出ている』劇中、下線は筆者)

このように、挙げ句の果てには、日本人から差別

を受けていた在日韓国・朝鮮人が、ある程度地位を持って、すなわち経済力をつけて東南アジアからの出稼ぎの外国人を雇用し、彼らを見下し差別してしまう構図が描かれている。英順は、外国人である彼女たちに昔の自分を重ねながらも、同時に差別されようと堂々と生きる彼女たちに戸惑いを覚え、嫌っているのだ。

そもそも、在日韓国・朝鮮人が受けてきた差別とコニーたちが受ける差別というのは質が異なる。日本スタイルに馴染みながら働いてきた英順や、もしくは通名を使用することもそうであるが、在日1世は生きていく手段としてやむを得ず同化¹⁶をしなければならなかった。韓国・朝鮮人であるという理由で差別され、無視され、あるいはいいように利用されてきた結果、彼らはアイデンティティを隠蔽することで生き延び、閉鎖的な存在となっていった。

これに対し、ニューカマーのコニーは、オールドカマーの英順や日本人から「東南アジアの女はだからダメ」などと差別されるが、そんなことはものともせず、「出稼ぎ」という目的で来日したフィリピン人である、という確固たるアイデンティティを持っている。英順とコニーのやり取りからは、閉鎖的にしか生きられなかった在日1世と、開放的なニューカマー、という対照的な姿が浮き彫りになる。

強制的に日本社会に同化しなければならなかった在日1世と違い、とりわけ1980年代後半から急増したニューカマーの多くはバブル景気によって発生した労働者不足を補うようにして来日した人々たちである。単純に人手が足りないということの他に、3K労働（きつい、汚い、危険）など、むしろ日本人がやりたがらない仕事を担うことで、しかしそれは決して強制的なものではなく、労働力としての需要と供給が一致したということができる。

また、在日1世の英順と異なり、2世の主人公、忠男の自由な言動からは、時代がすでに多民族・多文化の時代へと移行していることが読み取れる。在日2世忠男は、ニューカマーのコニーを見下したり、差別をしたりはせず、同じ土台に立って交流をする。忠男はコニーに対し「俺、君のことがよくわかる気がする¹⁷」、「コニー、お前の立場を理解できるのは、俺だけだぞ¹⁸」などといったことを言うのだが、これらは単なる口説き文句というよりは、在日1世とは全く異なる時代に生きる2世、3世の態度をよく表して

いる。

2-2 多民族・多文化社会へ

さらに、映画にはコニーの他に、イラン人の不法滞在の男性、ハッサンが登場する。日本とイランは1974年にビザ相互免除協定を締結したが、1988年にイラン・イラク戦争が終結してから、イランの経済状態が悪化し、出稼ぎ目的に来日するイラン人が急増した。映画の公開は1993年であるが、1994年には約19,000人のイラン人労働者が確認されており¹⁹、その多くが不法就労者であった。ハッサンが不法滞在であることが発覚して警察に捕まる場面は非常に暴力的に映る。必死に逃げようと足掻くものの、結局捕まってしまう。

ハッサンが捕まった状況に対し、雇い主の在日韓国・朝鮮人の世一は、「恩を仇で返しやがって、イラン人なんて掃いて捨てるほどいるんだ」、「不法外人はバンバン追い出しちまえばいいんだ」と放つ。世一の言葉は、まるで人間扱いをしていないようであるが、世一だけでなく、会社の同僚からもお金が無くなれば真っ先にハッサンが疑われるなど、当時の外国人差別が生々しく映る



【図2²⁰】警察に捕まるハッサン

ハッサンが捕まった状況に対し、雇い主の在日韓国・朝鮮人の世一は、「恩を仇で返しやがって、イラン人なんて掃いて捨てるほどいるんだ」、「不法外人はバンバン追い出しちまえばいいんだ」と放つ。世一の言葉は、まるで人間扱いをしていないようであるが、世一だけでなく、会社の同僚からもお金が無くなれば真っ先にハッサンが疑われるなど、当時の外国人差別が生々しく映る。

しかし同時に日本人の同僚のおさむはハッサンが疑われた時、以下のように話す。

おさむ：ハ、ハッサンを疑うのは、かわいそう

だよな

忠男： やけに肩持つな、おさむ

おさむ： そ、そりゃ人種差別ってもんだし、さ、差別はやっぱいけねえよな。こ、これからの日本は、た、多民族国家を形成するっっちゃうか…

(『月はどっちに出ている』劇中)

このように一見立派なことをいっているようなおさむも、コロンビア人の女性がタクシーに乗ろうとして「臭い」という理由で乗車を拒否する。人種差別はいけないということを理解しているようで、実際は全く分かっていない態度が描かれ、当時の日本社会の外国人に向けられる眼差しが浮き彫りとなった。

差別されてきた側のオールドカマーが、今度は日本人と一緒にあってニューカマーを差別する側に回ったり、オールドカマーといえど在日2世の忠男のように、ニューカマーと同じラインに立って自由に生きていたり、と映画では様々な姿が描かれたが、もう日本は日本人や、日本に馴染まなければ生きられなかったオールドカマーだけでなく、多民族、多文化社会へと変わっている最中にあるということを映画は伝えている。

そして、主人公の忠男とフィリピン人のコニーがふたりで同じタクシーに乗って、同じ方向に走っていくラストシーンは象徴的だが、崔洋一氏とともに脚本を執筆した鄭義信氏は、この場面について「最終的にあのラストでよかったんですよ。この先どうなるかわからないけど、2人が今ここにいるということが大切なんだと²¹⁾と語る。月がどっちに出ているのかも、これからの日本社会がどうなるのかも分からない戸惑いはあるけれど、共に同じ方向に向かって生きていく、そんなラストで締めくくられている。

崔洋一氏は映画について「国境を越えて自由になろうとする者たちにとっての、勇気であり、希望である、と僕は信じている²²⁾と語るが、本作は、日本社会の構成員としての外国人、オールドカマーとニューカマーの姿を映し出し、これからの日本がますます多文化社会となっていくことを大勢に気づかせてくれた映画となった。

本作品を機に、その後の映画や文学も、多文化という色が目立つようになる。1980年代後半から1990年代にもすでに日本語を母語としない作家、例

えばアメリカ人作家のリービ英雄氏やスイス人作家のデビット・ゾペティ氏などが活躍していたのだが、彼らはどちらかという、当時増えつつあったニューカマー像とは異なり、特に彼らのデビュー作は、外交官の家族として、あるいはエリートの留学生として来日していたりするなど、欧米出身の外国人が日本社会に馴染もうとする内容が描かれている。

そんな中、崔洋一監督の『月はどっちに出ている』(1993)ではじめて、当時日本に多かった出稼ぎのニューカマーや彼らを取り巻く問題が可視化されるかたちとなり、それから約10年後、2000年代以降になって、欧米出身だけでなく、中国人、台湾人、イラン人などの作家が出てくるようになった。

2000年代以降、「出稼ぎ」に限らず、留学や国際結婚等、自由意志で来日した人たちが多く、親の都合で日本で育つ子どもなどは、必ずしも「自由意志」とは言えずとも、そんな彼らも含めて、国境を越えて日本に暮らす外国人の実態が映し出される作品が次々と登場する。

外国人が移住先の言語で創作する文学を越境文学というが、世界における越境文学は、従来は亡命等の理由で国を逃れ、移住先から祖国を見つめなおした作品などが主流スタイルであったのだが、グローバル化が進み、社会がどんどん多文化に染まる現在の越境文学は、移住先での暮らしが当事者の視点から映し出されている。そこで本稿では、出身も立場も異なる様々なニューカマーの作家がそれぞれの立場から描いた作品から、日本の多文化社会に迫る。

I. 国際結婚と多文化共生

1. 楊逸のデビュー作『ワンちゃん』

2007年「ワンちゃん」(『文學界』2007年)でデビューを果たし、文學界新人賞受賞及び芥川賞候補作に選ばれた中国人作家の楊逸氏は、翌年「時が滲む朝」(『文學界』2008年)で第139回芥川賞を受賞し、日本語を母語としない外国人として初めての受賞ということもあって、大きく注目された。

選考委員会からは「国境を越えて来なければ見えないものが書かれている²³⁾と評価され、彼女は今までよく知られていなかった日本に暮らす中国人の姿を描き出すことに成功した。

楊逸氏はデビュー当時のインタビューにおいて以下のように語っている。

「身ひとつで日本に来て社会の主流に入るには小説を書くしかないと思った。在日中国人の中だけで生きるのではなく、世界を大きくたくて書き始めた」(中略)

「中国人の行動に至るプロセスや背負ってきた歴史なくして、日本人には中国人のことが理解できないのではないか。(中略)言葉では行き違いがあっても、小説で人間の背景を描くことでわかってもらえると思うんです²⁴」

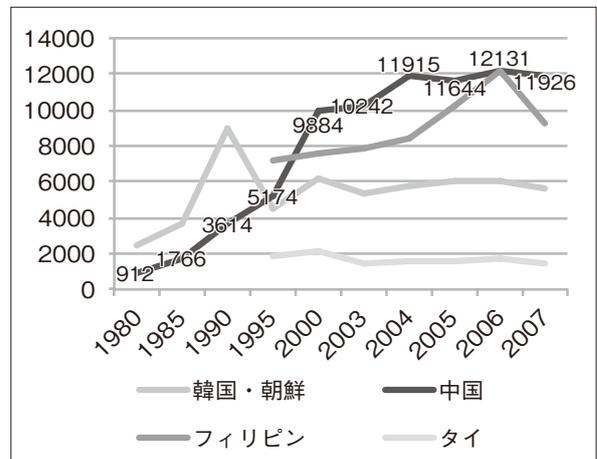
どのような過去を背負って来日したのか、どのように生きているのか、というテーマを軸として描きだす彼女は、他にも多くの立場の中国人の姿を作品に書き残している。彼女の登場がタイムリーだったのは、戦後から2006年まで在留外国人の最も多くを占めていたのが韓国・朝鮮人だったのに対し、翌年の2007年には、在留外国人総数215万人のうち中国人が28.2%(606,889人)と、韓国・朝鮮人の27.6%(593,489人)よりも上回り²⁵、日本に中国人が一番多くなったちょうどその時期に、在日中国人の姿を映し出したという点である。

楊逸氏は日本で暮らす様々な中国人の姿を描き出しているが、特に『ワンちゃん』と『時が滲む朝』では、主人公たちの来日背景と来日後、すなわち日中の越境を描き出している。前述したように2007年以降は中国人が一番多くを占めているが、そんな彼らの過去と現在(当時)を丁寧に描き出すことで、それまでの知られざる中国人の本当の姿を知らしめた。そこで本節では楊逸氏のデビュー作『ワンちゃん』(文藝春秋、2008年)を手掛かりに、彼女が映し出した国際結婚を通してやってきたニューカマー、とりわけ中国人女性の姿を浮き彫りにする。

『ワンちゃん』は、日本人と結婚した中国人女性が、夫に頼らず自立するために働き始める様子が描かれる。1980年代以降ニューカマーが急増し、それに伴い国際結婚も増えたのだが、2007年には18組に1組は国際結婚というほど数が大幅に増加した²⁶。佐竹眞明氏は、アジア人女性と日本人男性の結婚が増加していることに注目し、特にフィリピン人女性については過疎化が進む山形、岩手、新潟などの農村に嫁ぐ「農村国際結婚」が目立っていたことを指摘している²⁷。

厚生労働省の人口動態統計によると、図3のように夫が日本人で妻が中国人の組み合わせの数は右肩上がりであることが確認できるが、1980年はわずか912組だったのに対し、2007年には11926組、と約13倍以上も増えている。

武田里子氏は国際結婚を通して日本の農村にやってくるアジア人女性の定住に注目し、新潟県南部の南魚沼市で調査を行ったが²⁸、調査を通して初めは憧れていた生活とかけ離れた現実に失望を抱いたり、異国の地に慣れず一度は帰ろうと思ったりするものの、さまざまな事情で残ることになり、語学の講師や地域のイベントへの参加など、その場所に落ち着く外国人妻たちの存在を明らかにしている²⁹。



【図3】夫妻の国籍別にみた婚姻件数の年次推移(1980～2007³⁰)より筆者作成

『ワンちゃん』もまた、日本の四国の農村に嫁いだ中国人女性の話であるが、彼女がなぜ、どのようにして日本に来たのかという背景が描かれており、彼女たちの「今」(当時)だけでなく、過去をも垣間見ることができる。以下は『ワンちゃん』のあらすじである。

中学を卒業し、15の時から縫製工場で働き始めたワンちゃん(王愛勤)は、18歳の時に洋服の露店を出すなど、働き者の人生を送っていた。19歳の時、21歳の男と授かり婚をしたが、夫は結婚後間もなく仕事を辞め、無職の遊び人となってしまった。しかしワンちゃんは一人の力で商売を続け、店を12、3軒持つまでに成長した。彼女は夫の浮気を目撃したことを機に29歳で離婚。しばらく商売を続けるも、経営難に直面したのに加え、金をせがみにやってくる元夫などの問題で、店を全て畳み、人生を新しくやり直そうと、逃げるようにして日本人の男性とお見

合い結婚をし、来日した。

四国で暮らすワンちゃんは、旦那は行きもしない姑のお見舞いに通いながら、日本の田舎の男性と中国の田舎の女性をターゲットとしたお見合いビジネスをはじめ。ワンちゃんは田舎の日本人男性を中国に連れていき、合同結婚式やビザの手続きなどまでをケアする。中国の女性たちも、離婚歴や子持ちなど、事情を抱えた人々が多いが、条件が見合えば大半は無事にマッチングに成功する。

ビジネスとは別に、ワンちゃん自身も、無口な上にいきなり怒りだす夫に息苦しさを感じたり、顧客の一人に恋心を抱いてしまったり、入院した姑に寄り添ったり、と色々抱えて生きるが、容態が悪化した姑が亡くなったところで物語は幕を下ろす。

真実の恋が実らなかつたり、生きる意味となっていた姑が亡くなってしまったりと、本作は読後に切なさを漂わせるが、どんな過去があろうと、どんな今があろうと、自分ができることを見つけ、一生懸命に働く主人公の姿は逞しく映る。田村景子氏はこの、ワンちゃんの働きぶりに注目し、本作が「過酷で不安定な場所に生きて働く無数の孤独な生へのエール³¹⁾」だと分析する。また、斉金英氏はワンちゃんの来日方法であり、ビジネスとなっている国際見合い結婚に着目し、逃げるように日本にきたワンちゃんや外国人妻たちの「痛み」が映し出されていると指摘する³²⁾。

陳晨氏はこれらの「日本語」以外に着目した先行研究に加え、ワンちゃんという人物を一面的にみるのではなく、何度もめげずに次に進んだり、お見合いをする中国人女性に同情しつつも日本人男性に恋心を抱いてしまったり、といった「いくつもの欲望が同時に重層的に存在³³⁾」するがゆえに「リアルな³⁴⁾」人物であると分析する。ここでは『ワンちゃん』に映し出された「リアル」に注目し、それまで知られることのなかった国際結婚で来日した中国人女性の姿を探っていく。

2. 越境して人生を切り開く中国人女性

ワンちゃんが生きてきた中国とは、作者の楊逸氏が生きた文革の時代である。ワンちゃんが働くようになってから、すなわち1970年代後半から1980年代のはじめに、改革開放の風が吹き始め、その後の経済発展により、大都市部では洋服ブームが起きるな

ど³⁵⁾、灰色の世界がどンドン色とりどりに染められた。特に大きく変わったのは「灰色に抑えられていた金銭欲」(36頁)で、商売人になるブームが引き起こった。

ワンちゃんも妊娠中、商売のことが気になって仕方がないほど働いて稼ぐことが性に合っており、文革を生き延びた彼女には夢のような時間だったことが分かる。自由のなかった時代と自由がでてきた両時代を経験するワンちゃんは、元夫から見つからないように国際お見合い結婚をして来日する。「どんな人でもいいから探して、結婚して外国で暮らせるのならば」(40頁)という思いからも分かるように、少なくともワンちゃんの来日理由は日本への憧れではない。だが、彼女は、逃れてきた場所で、自立した人生を新たに歩んでいく。

ワンちゃんは、旦那から自立するために、日本人の田舎の男性と、中国人の田舎の女性をターゲットにお見合いビジネスを始める。中国の田舎で見つけた女性たちは都会育ちの女性と異なり、ワンちゃんのように複雑な事情を抱え、本国で結婚するのが難しい人が多い。離婚歴はもちろんのこと、男の子が産めなかつたら追い出されてしまうのではないかと不安に思っていたり、産んだとしても2人目で高い罰金を取られた経験がある人がいたり、と彼女たちの抱える状況は様々だ。ここからは、一人っ子政策や、男の子を産むことが良いこととされる中国社会に生きる女性たちの姿が浮き彫りになる。

一方、田舎の日本人男性は中国人女性の切実さとは異なって、母親の面倒、商売の手伝い、家事などを目的としている場合が多いのだが、息子が温かい家庭を築けるように願う顧客の母の話を聞いて、ワンちゃんは感動し、「お婆ちゃん、私の紹介、安心ください。良い女を、絶対」(49頁)という。ビジネスとはいえ、顧客に感情移入してしまう彼女は人間味があるが、同時にただならぬ使命感を持って仕事に挑んでいる。国際結婚の斡旋と聞くと、ポジティブなイメージで捉えられることは少ないと思われるが、ワンちゃんからしてみれば色々な事情で結婚をしたい、あるいはさせたいと思う日中の男女、及びその家族を助けていることになる。結婚後の生活が決して薔薇色だとはいえなくても、それがまずは次に進むための過程と捉えているのだ。彼女もまた、結婚を通して次の道へと進んだ一人である。本作が発表される十数年前に公開された映画、『月はどっちに

出ている』(1993)でも、ニューカマーが日本社会の構成員として自身の役割を果たす様子が映し出されていたが、ワンちゃんも同じである。日本の田舎の花嫁不足を、東南アジアや中国の女性たちが満たすという事実もそうであるが、何よりもワンちゃんの、自立して生きていこうとする姿勢は、日本人がそれまで知り得なかったニューカマーの強さを物語っている。以下はワンちゃんが夫に頼らずに日本で暮らしていくためにビジネスを始めることを決意する場面である。

「自立せんとあかん」ワンちゃんは日本語が少しわかるようになるとうすぐ行動を起こした。この何も知らない日本で、言葉の不自由な中国人が、しかも中年のおばさんが、服の商売をするのはどうも無理のようだ。色々考えた末、辿り着いたのが国際結婚の仲介人であった。(中略)ワンちゃんは、自立する道への第一歩を踏み出し、涙ぐんだ。

(『ワンちゃん』63-64頁³⁶)

「越境」というのは単なる身体の移動ではなく、特に国際結婚となるとその後の「人生」の移動であるが、日本に来て、今現在自分がいる場所で、できることを見つけ、また新たな人生を歩み始めたのだ。きっかけがお見合いであれ、恋愛であれ、「国際結婚」は大抵どちらか一方が人生の移動をする。ワンちゃんは移動した先で、色々あっても結局は日本で生きていくことには迷いのない様子が描かれている。以下はお見合いビジネスの顧客の土村と打ち合わせをした時の場面である。

酒も話も盛り上がった。思わぬ人と思わぬところで、思わぬ味のお酒を飲んで、ワンちゃんは長年憧れていた幸せの気分を味わうことができた。(58頁)

ここからは越境した後の「思わぬ」人生が悪いものばかりではないことが読み取れる。どんな事情を抱えていようと、今を生きている人間であることに変わりはない。自身も何度も泣いて挫けそうになりながら、しかしその度に必ず立ち直って次に進んでいく強さを失わないワンちゃんは、国際結婚をした中国

人女性のほんの一部の姿かもしれないが、彼女を通して、今まで知られることのなかった日本に暮らす中国人妻たちの越境について、すなわち彼女たちの過去や今を考えるきっかけとなる。

また、前述したように「国際結婚」をした女性たちの数は明らかに多かったはずなのに、『ワンちゃん』が発表される前までの日本人の中国人像といえば「アルバイトに明け暮れる留学生、不法滞在者、単純労働者や中国料理店の店員、マッサージ師³⁷」、などといった極端なものであった。そこで『ワンちゃん』は、それまでなかなか表に出てこなかった女性たちを映し出し、特に主人公を通して中国人女性の逞しさを描き出した。

中国人像、すなわち「イメージ」というのは簡単には覆されるものではないが、『ワンちゃん』は中国人女性の現実を知らしめたことで、偏見を変えていく要素となったと考えられる。

楊逸氏は『ワンちゃん』(2008)の他にも、様々な立場の中国人を描いている。『金魚生活』(文藝春秋、2009年)では、国際結婚をして日本で出産する娘のために来日した中国人の母親が描かれていたり、『すき・やき』(新潮社、2009年)では、アルバイトをしながら日本に馴染んでいく中国人留学生在が描かれていたりするなど、立場や世代によっても登場人物たちの目に映るものは異なる。しかしだからこそ、彼女の作品の登場人物は立体的に映り、単なる物語を超えて、日本社会にいる中国人ニューカマーの存在を改めて気づかせてくれるものとなっている。

Ⅱ. 外国人児童生徒と多文化共生

1. 移動する子どもたち「来福の家」(2011)

労働、結婚、留学などニューカマーは様々な形で来日するが、そのほとんどは自らの意思で移動している。しかし、自分の意思に関係なく来日、あるいは生まれ育つ子どもたちがいることを忘れてはならない。2017年から施行された教育機会確保法により、2019年度からやっと始まった「外国人の子供の就学状況等調査」では、2021年時点で学齢期の外国人児童生徒数が合計約13万3,310人いることが報告された³⁸。不就学や、就学状況を確認できない子ども、学校に通っていても日本語の壁で授業についていけない子ども、日本語ができない親を持つ子どもなど、外国人児童生徒をめぐる課題は絶えないが、

日本で育った外国人としてその気持ちを書き続ける作家がいる。

温又柔氏は、台湾で生まれ、3歳の時に来日した。東京ではあったが、彼女の周りに外国人はおらず、「ほぼ一人で外国人代表みたいな環境で³⁹⁾」学校生活を送った。3歳の時に来日しているため、彼女の場合、母語は「日本語」、母国語は「中国語」といえる。言われないと、いや、言われても台湾人だとはすぐに分からない、まるで日本人のような外国人の彼女の事情は少し複雑にも聞こえるかもしれないが、決して珍しい存在ではない。そんな彼女が書き続けるのは、彼女のように外国にルーツを持ち、日本で育つ人々である。

温又柔氏は2009年「好去好来歌」にて、自身と同じ3歳の時に台湾から来日し、日本で育った女性を主人公に、そのアイデンティティの葛藤を描き出し、第33回すばる文学賞佳作を受賞した。2011年集英社が「好去好来歌」と「来福の家」の2編を収録した『来福の家』は、2016年に白水社が新書版として復刊した小説集であるが、「好去好来歌」が言語を含むアイデンティティの葛藤で苦しむ心情がテーマであった一方で、表題作の「来福の家」は、より日本社会に生きる姿が当事者からの視点だけでなく、俯瞰的にも描かれている。川上郁雄氏は、本書を以下のように評価している。

幼少期より複数言語環境で成長する子どもにとって重要な課題は、語彙や作文力の量的調査ではわからない世界にあるということである。バイリンガルの子どものいかに作るかということだけを目標にするような研究は、(中略)なんら意味をなさない。本書は、まさに、21世紀に必要な「移動する子ども」をめぐる学術的「研究成果」として高評価できる作品である⁴⁰⁾。

移動する子どもの心情や、彼らが生きる様子が詰まっている本書から得られることは多いということが確認できるが、残念ながら、本書を含む温又柔氏の他の作品における分析は非常に少ないのが現状である。家族呼び寄せやハーフだけでなく、日系人など、外国ルーツの人は多いのに、その実態はあまり知られていない。そこで、本節では「来福の家」から、日本育ちの外国人について探っていく。「来福の家」

のあらすじは以下のとおりである。

台湾人の両親のもと、東京で生まれ育った許笑笑は、大学を卒業後、中国語専門学校の中国語学科に合格した。日本で日本人と同じように育った笑笑は、中国語がほとんどできなかったため、今からでも勉強を始めようと決意したのであった。笑笑は入学手続きに必要な書類を取りに役所に行くのだが、外国籍のため、住民票ではなく外国人登録証原票の写ししか取れないなど、在留資格を意識せざるをえない場面が度々出てくる。

小学校の教師をする日本人の男性と結婚した姉は、公立小学校で日本語教師として働いており、姉の夫、瀬戸さんが担任するクラスにも中国から来日した児童がいるなど、笑笑は自分のような子どもが増えていることを実感する。

日本語、中国語、台湾語で過ごす笑笑であったが、姉の歓びと共に自分たちの名前の響きに誇りを持ちながら物語は幕を閉じる。

第33回すばる文学賞の選考委員であった星野智幸氏は、温又柔氏が「日本語文学の裾野を広げる」と評したが⁴¹⁾、本書の解説にて以下のように述べている。

日本の文学には、移民を書いた作品があまりにも少ない。日本から出て行く移民も、日本に入ってきた移民も。ルーツと異なる土地に暮らす人を移民と呼ぶならば、わずかに在日の人たちの文学が、狭間に置かれたアイデンティティを描いてきたきりだ⁴²⁾。

国際結婚を通して日本へ移住した中国人を描いた楊逸氏や、そのほか前から存在していた在日文学の他に、外国人が日本で生きていくということがテーマになっている小説は少なかったが、そこに温又柔氏が仲間入りした。「来福の家」では主人公だけでなく、主人公の姉や義兄を通して外国ルーツの児童生徒が増えている様子が読み取れる。

2. 外国人児童生徒を支える大人たち

笑笑の姉は都内各地の公立小学校で日本語教師として、中国や台湾から来日したばかりの児童に中国語で日本語を教える仕事をしている。文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に

関する調査」によると、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数は 2008 年に 33,470 人だったところから 2018 年には 51,126 人に増え、10 年間で約 1.5 倍の増加が見られる⁴³。



【図 4⁴⁴】宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター主催、HANDS 事業の 8 言語による高校進学ガイダンスの様子

以下は姉が児童を担当したときの描写である。

——許先生が来ると、莉莉の表情が、明るくなるんです。

薛莉莉ちゃんの担任の先生がそういつてくれたの、と照れながらいったときの姉は心底嬉しそうだった。その先生は、姉が迷っているのを見抜いて励ましてくれたという。

——莉莉は、ふだん、ことばがわからない中、必死にがんばっているんです。だから許先生も、日本語を教える、というよりは、中国語でたくさん莉莉の話聞いてあげてください。それが、莉莉にとって次もがんばろうって力になるんですから……

よかったね、とわたしは姉にいった。莉莉ちゃんは、いい先生と出会えて。

(『来福の家』169-170 頁⁴⁵、下線は筆者)

日本語を一言も話せないまま、両親の都合で来日した薛莉莉ちゃんのような子どもも増えているが、ここでは、そんな子どもたちを支える大人たちの姿が浮き彫りになる。本人の意思とは関係なく日本に連れてこられ、日本語を強要され、話したくても話せない子どもたちをどのように支えていくのか。莉莉ちゃんの担任の先生の言葉には、日々辛い思いをする外国人児童生徒に必要な眼差しが含まれている。子どもたちに必要なのは「日本語の知識」だけではなく、寄り添う気持ちもなければならない。

莉莉ちゃんは、その後主人公の姉の夫のクラスに入るのだが、結婚式の寄せ書きに中国語でメッセージを書く。

——祝賀瀬戸老師和許老師的結婚……

はじめ、小学生が書いたとはとても思えなかった。端生な文字だった。わたしの字よりおとなっぽいな、といったら、姉だけでなく瀬戸さんも笑ったのだった。

——僕なんかみたら、あっというまに日本の生活に馴染んでいるように思えるけど……
きっと、僕らのようなふつうの日本人には想像もできないような苦勞があって必死で頑張っているんだらうね。 (172 頁、下線は筆者)

来日時だけ気にかけるのではなく、馴染んでいるように見えてもその裏に隠れた必死な努力を見逃さないことも大切だということが読み取れる。外国人児童生徒だけではない。日本に生きる全ての外国人に当てはまる。どのような悩みを抱え、どのように頑張っているのか、といちいち言うことや聞くことはもちろんできなくても、見えることだけが彼らの全てではないという意識を少しでも持つことが必要であることを物語っている。

——やっぱり台湾や中国からの子どもさんが多いですか？

と瀬戸さんのお父さん。瀬戸さんを見やりながら、韓国や最近ではフィリピンからの子どもも多いです、と姉。

——同僚に、タガログ語の堪能な子がいるんですが、わたし以上に、忙しそうにあちこち廻っています。タガログ語のできる講師ってまだまだ少ないみたいで…… (220 頁)

また、出身国の言語も人もますます多様化する中で、教育現場も柔軟に対応していくことが求められる。2018 年度は「指導者がいない」という理由で「2 万人以上の児童生徒が日本語の授業を受けられ⁴⁶」ず、文科省の 2021 年の報告「外国人児童生徒等に関する文部科学省の取組について」によると、学齢期を超えても「日本語指導が必要な高校生の中退率、非正規就職率、進学も就職もしていない者の比率は、

高校生一般の水準から見ると極めて高い⁴⁷⁾ という結果が出ている。本作が発表されたのが2011年であるが、2013年度から補助事業として始まった「帰国・外国人児童生徒等に対するきめ細かな支援事業」は、2022年時点で28都道府県、15指定都市、20中核市、の63地域で行われ⁴⁸⁾、自治体レベルでの取り組みが進みつつある。物語からは、当時の外国人児童生徒の教育の実態が垣間見える。

国だけではなく、地域においても例えば大学が中心となって、外国人児童生徒の学習や進学を応援したり、調査や研究会が行われていたりするなど、さまざまな取り組みが行われている。

このように日本で育つ外国人児童生徒に寄り添うための努力は地域レベルでも国レベルでも徐々になされてきているが、本書は、当事者の気持ちとともに、彼らを支える姿勢について浮き彫りになる。

Ⅲ．難民と多文化共生

1. 留学生の視点から難民問題を描く「サラム」(2007)

2021年3月、名古屋出入国管理局に収容されていたスリランカ人女性が必要な医療を受けられずに亡くなった事件を受け、近年は入管をめぐる問題が再び注目を集めつつある。2021年の政府による入管法改正案は、「難民申請をしている外国人でも強制的に母国に送還されることや、退去命令に従わない人に罰則を設けるなどの点が難民条約違反、人権侵害であるとして弁護士団体や学者など国内外から批判を浴び⁴⁹⁾」、廃案となった。

また、日本は欧米に比べ難民認定率が非常に低いことでよく知られるが、2009年から2020年まで50人を超えることがなかった難民認定者数が、2021年になってミャンマー情勢の悪化によって74人に上るなど⁵⁰⁾、今後の行方が注目される。



【図5⁵¹⁾】名古屋入管の死亡事件の被害者遺族と弁護士

1998年留学生として来日したイラン出身の作家、シリル・ネザマフィ氏は、2009年「白い紙」でイラン・イラク戦争下のイランを舞台にイラン人の若者の姿を描き、第108回文学界新人賞を受賞したが、その前作「サラム」(『世界』2007年)において日本における難民の姿を描き、「留学生文学賞」の第4回大賞に輝いた⁵²⁾。2001年に始まった「留学生文学賞」は、日本で学ぶ留学生のための日本語文学新人賞で、2010年まで続いた。栖原暁氏は、留学生文学賞に寄せられる作品について「我々日本人には見えない日本社会が彼らには見えているということ」を感じると話す⁵³⁾。本節では、「サラム」(『白い紙 / サラム』文藝春秋、2009年)を手掛かりに、留学生の目に映った日本における難民の姿や入管問題を浮き彫りにする。以下は、「サラム」のあらすじである。

通訳のアルバイトをする留学生の「私」は、弁護士の中田先生に雇われ、入管に収容中のアフガン人、レイラの難民申請を手伝う。レイラは、読み書きもできず、親から正確な生年月日を告げられていない、17か18くらいの女性であったが、父親はアフガニスタンで有名なハザラの司令官であり、母はタリバンに殺され、ふたりの兄のうち一人も戦争で死に、もう一人は父と一緒にパキスタンにいた。レイラは仮釈放され、難民支援のボランティア団体が保証人となり、同じ団体が運営する協会が彼女を引き取るようになった。

難民(申請者)の人々はこういったボランティア団体を通して、仕事や寝泊まりできる場所、さらには裁判のための弁護士などを探すという。教会で過ごしなが、少しずつ元気を取り戻すレイラであったが、彼女の難民申請は、レイラが司令官の実の娘だという証拠がないという理由で不認定となる。さらに、中田先生は調査を進める過程で、レイラの父親がすでにタリバンに殺され、一緒にいた兄も行方不明になったことを知る。このあまりにも悲惨な事実をレイラ本人に伝えられなかった中田先生であったが、レイラは入管からその事実を知らされる。

また、アメリカの同時多発テロでさらにアフガン人のイメージが悪くなってしまい、レイラの状況は一気に不利になってしまう。そして入管に再度収容され、強制送還されてしまうところで物語は幕を下ろす。

あまりにも悲惨な事情を背負って日本に来たものの、日本という国は彼女のような人々を救える場所で

はなかったどころか、むしろ彼女を閉じ込め、挙句の果てに命の危険が待つ国へ帰した。レイラに会うまで収容所について知らなかった主人公の「私」は、当初以下のように感じている。

刑務所のように刑務所ではない。収容所という呼び方のほうが適切だという。でも何が違うんだろう。(中略) 事務の金子さんは“悪いことをしていない人達の居場所だけど、悪いことをしたように思い込ませる場所だ”と熱く語る。比較的冷静な田中先生は単に“外国人の収容所だ”と説明した。どういうところかは気になるけど、その場所がどうこうというより、外国人として外国人の収容所に足を踏み入れるのは正直少し怖い。

(『白い紙 / サラム』80-81頁⁵⁴)

閉じ込めるだけでなく、命を落とすこともあるのが今の日本の入管だ。「私」とレイラは、同じ外国人ではあるが、留学生と難民申請者、という全く異なる立場だ。「在留資格」の有無で、人権が保障されるか、されないかが決まるのだ。

レイラの他にも入管に収容されているアフガン人が何人かいて、その中のグラムという中年男性は、アフガニスタンで事実無根の罪でタリバンに捕まって拷問を受け、どうにかして解放され、国外へ避難し、インド、マレーシア、日本へと渡ってきた。彼は難民申請をしたが不認定となり、入管に収容されたままとなった。

グラムはタリバンに捕まって拷問を受けた経験から、精神が不安定になってしまい、収容中、自殺を図って病院に搬送される。以下の入管の職員の会話を耳にする場面は、近年騒がれている入管の問題がそのまま現れているようである。

レイラとの面会の部屋から出るとき、入管の職員の話が耳に入った。彼らによればグラムは人の注目を集めるために、よくこういう変な行動するのだと言う。今回はちょっとやりすぎたけど、きっと治ってまた戻ってくる。こんな状況に慣れきっている入管の職員の話は異常なほど冷たかった。(103頁)

人間としての尊厳など微塵も感じられない職員の反応が、単に小説の中だけの話ではなく、現実でも同じことにさらなる憤りを覚えずにはいられないが、入管の職員の反応もまた、帰国させたり、閉じ込めたりする国のルールが生み出した結果である。「私」は田中先生に疑問をぶつける。

国を弁護したいわけではないが、もし日本が簡単にアフガン人の難民認定を出すようになれば、これから何十万人ものアフガン人が日本に流れてくるかもしれない。アフガニスタンだけではなくほかの国からも。比較的安全な場所で仕事もあり安定な生活を送れる環境が整っている日本は、自分の国が荒れている人達にとってはとても魅力的な場所です。でもほとんど日本人しか住んでいない日本を多国籍国に変えることは非常に難しい。しかも、あらゆる文化や国籍が混じるところでは問題も起きやすい。(中略) まして日本は単一民族に近い国家です。難民を多く受け入れると数十年後にはたぐさんの問題を抱えるようになるでしょう。(121頁)

本作が書かれたのは2006年で、2007年に発表されているため、ちょうど「多文化共生」などといった言葉が出てきた頃である。それから十数年後の2023年現在の日本は、完全に多文化社会となった。しかし、「難民」の受け入れが消極的だということは今も昔も変わらない。

2. それでも共に生きようと寄り添う人々

このように国の姿勢や入管の収容制度がなかなか改善されない中、難民や収容中の人々に寄り添ってきた弁護士や支援団体の日本人はどのような思いで彼らを支えてきたのか。以下は、レイラが強制送還される場面である。

タオルを手で握りしめながらおでこを拭くことさえ忘れていた田中弁護士は、どうしてここにいるんだろう。こんな早朝に、街から遠いこの空港。ボランティア精神にもほどがある。(中略) その横で心配そうに目を潤わせている事務の金子さんはどうしてこんなに朝早くからこんなに遠い場所にいるんだろう。必死で涙を飲み込んで

いる彼女には家庭がある。二人の可愛い子どももいる。本来ならば今頃は玉子焼きをお弁当箱に詰めているはずなのに。いくらボランティア団体とは言え、ここまでする必要はない。なのにどうして。(中略)

この二年間、ボランティア精神以外のことを感じさせなかったこの人たちの曇った顔は号泣の一手前だ。どうしてここまで？

わからない。今まで考えたこともなかった。

(142頁)

ここからは田中弁護士や支援団体の金子さんは、レイラを一人間として接している。助けたいという思い一つで寄り添った日本人の姿が浮き彫りになる。冒頭でも触れた名古屋入管に収容されていたスリランカ人女性の死亡事件も、日本の外国人入管法連絡会や人権団体が現在も遺族を支えながら、同じような悲劇が繰り返し起こらないよう、必死に訴え、闘っている。レイラが強制送還になる際、見送っていた日本人と、外国人ではあるけれど立場が異なった「私」が経験した心苦しい思いは、現在も繰り返されているのだ。

栖原暁氏は本作を「日本の中に間違いなく存在するが、日本人が知らない世界を、彼らならではの視点で、我々に提示してくれる⁵⁵」と説明するが、「サラム」からは数字に隠れて見えていなかった人々の人生が浮き彫りになる。ただ難民を闇雲に受け入れれば良いといった話ではなく、難民や日本に暮らす外国人と日本はどのように向き合っていくのか、ということを考えさせられる。

おわりに代えて：広がる越境文学

移住先の言語で創作をする越境文学は、英語圏、フランス語圏、ドイツ語圏などで、迫害や亡命、植民地支配等で移動した人々によって始まったものであり、従来は移住先、あるいは亡命先から、祖国を見つめるといったスタイルが主流であった。

日本は、ニューカマーが登場する前まで、戦後も日本に残り続けた在日韓国・朝鮮人による、在日韓国・朝鮮人文学があったが、彼らも「自由意志」による越境とは完全に異なり、とりわけ1世は日本で生きていくには個性やアイデンティティを隠さざるを得なかったあらゆる苦難の内容が主に描かれてきた。

しかし、世界でグローバル化が進み、人の移動がより自由になったことで、日本にも1980年代後半頃からニューカマーが急増する。前述したようにその頃からすでに、日本語を母語としない欧米出身の作家たちが登場していた。1987年「星条旗の聞こえない部屋」(『群像』3月号、講談社)でデビューを果たし、現在も日本に暮らすアメリカ人作家のリービ英雄氏や、1997年『いちげんさん』(集英社)で芥川賞候補作として選ばれたスイス人作家のデビット・ゾパティ氏など、彼らは当時増えていたアジア人ニューカマーの労働者たちとは異なるものの、いずれも外国人として日本社会に入ろうとする姿を描き、日本文壇を驚かせた。

そして同じ頃、在日2世の崔洋一監督は、社会がますます多国籍の人で溢れてきた現実を受け止め、『月はどっちに出ている』(1993)を通して、自由意志で移動してきたニューカマーの人々の存在を知らしめたと同時に、それまでの単一民族主義的な社会から多民族・多文化社会へとフレームが移行している事実を伝えた。

彼の作品を発端に、2000年代以降、越境者の生活を当事者の視点から映し出すニューカマーの作家らが登場する。丁貴連氏は、彼らの越境文学に、メディアや多文化共生社会の構築を目指す関係者が触れていない「外国人たちの内なる現実」が映し出されていると指摘しているように⁵⁶、労働、結婚、留学、家族呼び寄せなど、彼らの来日背景や理由は様々だが、国境を越え、移住先で生きていく人々の暮らしからは、多様な価値観や感受性が浮き彫りになり、これらは日本文学だけでなく、日本社会にも新しい息吹を注いでいる。

このように、グローバル化が進むとともに、越境文学も広がりを見せていたのだが、残念ながら現在その勢いは衰えている。もちろん、2021年にアメリカ出身のグレゴリー・ケズナジャット氏が『鴨川ランナー』(講談社、2021年)で第2回京都文学賞の海外部門、一般部門の両部門で最優秀賞に選ばれたり、同年台湾出身の李琴峰氏が『彼岸花が咲く島』(文藝春秋、2021年)で第165回芥川賞を手に行ったりするなど、一部の作家の活躍もたまに見られるが、2000年代に比べ、作家も作品数も停滞している状況だ。

その原因は、まさに社会にあると言わざるを得な

い。国は日本に暮らす外国人を「移民」と認めず、多文化社会でありながらもその現実から目を背け、崔洋一監督やニューカマーの越境作家たちが投げかけてきたメッセージをいまだに生かすことができていない。

そういった意味で「多文化共生」を掲げている今こそ越境作家たちの声と向き合うべきだと考える。そして、越境者の生活を映し出してきた楊逸氏、温又柔氏、シリル・ネザマフィ氏に続く、次なる作家の登場に期待したい。

¹ 宇都宮大学大学院地域創生科学研究科博士後期課程

² 崔他 (1993) 50 頁。

³ 同上。

⁴ 同上。

⁵ 崔 (1994) 32 頁。

⁶ 崔・山根 (1993) 60 頁。

⁷ 崔前掲 (註5)、47 頁。

⁸ 「崔洋一さん 「月はどっちに出ている」の監督 (インタビュー)」『朝日新聞』(1994 年 1 月 31 日付) 朝刊、大阪面。

⁹ 同上。

¹⁰ 崔・関川 (1993) 75 頁。

¹¹ 崔他前掲 (註2) 53 頁。

¹² 崔・柳 (1994) 124 頁。

¹³ 駒井他 (1996) 95 頁。

¹⁴ 同上、99 頁。

¹⁵ 『月はどっちに出ている』キャプチャ。

¹⁶ 李・田中 (2010) 179 頁。

¹⁷ 同上。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 駒井他前掲書 (註13) 20 頁。

²⁰ 『月はどっちに出ている』キャプチャ。

²¹ 崔・鄭 (1993) 93 頁。

²² 同上、236 頁。

²³ 天声人語『朝日新聞』(2008 年 7 月 7 日付) 1 面。

²⁴ 小山内伸「小説で中国人のこゝと伝えたい 文学界新人賞、楊逸さん受賞」『朝日新聞』(2007 年 11 月 29 日付、朝刊) 27 面。

²⁵ 出入国在留管理庁「在留外国人統計(旧登録外国人統計)」(2008 年 8 月 13 日公開) https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&stat=000001018034&cycle=7&yyear=20070&month=0&tclass=000001060436&result_back=1&tclass2val=0 (2022 年 11 月 21 日最終閲覧)。

²⁶ 曲 (2010) 265 頁。

²⁷ 佐竹真明「フィリピンー日本国際結婚：移住と多文化共生：日比結婚の概要、結婚生活、結婚移民に対する施策、行政への提言」(アジア女性交流・研究フォーラム主催、国際シンポジウム「国際結婚と多文化共生」報告資料、2011 年) http://www.kfaw.or.jp/report/pdf/2011.01.22_Satake.pdf (2023 年 1 月 17 日最終閲覧) 2 頁。

²⁸ 武田 (2009) 23-24 頁。

²⁹ 同上、28-30 頁。

³⁰ 厚生労働省「人口動態統計年報 主要統計表(最新データ、年次推移)、第2表 夫妻の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/marr2.html> (2022 年 12 月 24 日最終閲覧) より筆者作成。なお、フィリピン、タイは平成4年から調査されているため、その前のデータなし。

³¹ 田村 (2010) 177 頁。

³² 齊 (2011) 38-48 頁。

³³ 陳 (2016) 135 頁。

³⁴ 同上。

³⁵ 佐野 (2005) 69 頁。

³⁶ 楊 (2008)、以下頁数のみ記す。

³⁷ 中島恵「「不法滞在者ばかり」は昔、増える高度人材の中国人」『日経 BizGate』(2018 年 1 月 9 日付 <https://bizgate.nikkei.co.jp/article/DGXZMO3944067027122018000000/>) (2022 年 12 月 30 日最終閲覧)。

³⁸ 川端珠紀「日本にいる外国人の子供、約1万人が不就学の可能性…文科省」『リシード』(2022 年 3 月 28 日付) <https://reseed.resemom.jp/article/2022/03/28/3590.html> (2023 年 1 月 6 日最終閲覧)。

³⁹ 温 (2019) 158 頁。

⁴⁰ 川上 (2018) 87 頁。

⁴¹ 温 (2016) 272 頁。

⁴² 同上、273 頁。

⁴³ 「日本語が必要な子供たちの教育」『日本語ジャーナル：日本語を「知る」「教える』』(2022 年 2 月 10 日) <https://nj.alcnihonggo.jp/entry/20220210-kodomotachi> (2023 年 1 月 7 日最終閲覧)。

⁴⁴ 「HANDS 事業活動内容」『宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター HP』<https://cmps.Utsunomiya-u.ac.jp/hands/> (2023 年 5 月 22 日最終閲覧)。

⁴⁵ 温前掲書 (註39)、以下頁数のみ記す。

⁴⁶ 「日本語指導の担当教員とは 不足で外部人材起用も」『日本経済新聞』(2021 年 9 月 15 日付) <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE145VM0U1A910C2000000/> (2023 年 1 月 9 日最終閲覧)。

⁴⁷ 外国人との共生社会の実現のための有識者会議 (第3回) 「外国人児童生徒に関する文部科学省の取組について」(2021 年 4 月 28 日付) <https://www.moj.go.jp/isa/content/001342224.pdf> (2023 年 1 月 15 日最終閲覧) 1 頁。

⁴⁸ 「令和4年度(2022)帰国・外国人児童生徒等教育の推進支援事業「I. 帰国・外国人児童生徒等に対するきめ細かな支援事業」(補助事業)実施地域」『文部科学省 HP』(2022 年 4 月 1 日時点) https://www.mext.go.jp/content/20221027-mxt_kyokoku-100002007.pdf (2023 年 1 月 15 日最終閲覧)。

⁴⁹ 「入管法改正案が廃案へ、「人権侵害」と野党や国内外から批判」『トムソンロイタージャパン』(2021 年 5 月 18 日付) <https://jp.reuters.com/article/law-immigration-idJPKCN2CZ0FS> (2023 年 1 月 9 日最終閲覧)。

⁵⁰ 「我が国における難民庇護の状況等」『出入国在留管理庁 HP』令和4年5月13日付 <https://www.moj.go.jp/isa/content/001372237.pdf> (2023 年 1 月 9 日最終閲覧)。

⁵¹ 道永竜命撮影「スリランカ人遺族、名古屋入管幹部を刑事告訴 殺人容疑で」『毎日新聞』(2021 年 11 月 9 日付) <https://mainichi.jp/articles/20211109/k00/00m/040/257000c> (2023 年 5 月 23 日最終閲覧)。

⁵² 栖原 (2010) 12 頁。

⁵³ 同上、12 頁。

⁵⁴ シリン (2009)、以下頁数のみ記す。

⁵⁵ 栖原前掲 (註 52) 12-13 頁。

⁵⁶ 丁 (2018) 26 頁。

参考文献

- 駒井洋編 (1996) 『日本のエスニック社会』 明石書店
- 温又柔 (2016) 「U ブックス版あとがき」(温又柔『来福の家』 白水社)
- 温又柔 (2019) 「私の日本語、私の中国語」(『開かれた移民社会へ』 藤原書店)
- 川上郁雄 (2018) 「「移動する子ども」という記憶と温又柔」(『多文化社会研究』4 号、長崎大学)
- 木村有伸 (2009) 「日本人の「国際化」議論における日本特殊性の信念—その内容と問題点—」(『立命館国際研究』22 巻 1 号、立命館大学)
- 曲曉艷 (2010) 「国際結婚に関する研究動向と展望」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』49 号、東京大学大学院教育学研究科)
- 佐野孝治 (2005) 「中国アパレル産業の現状と課題—「縫製工場」から「アパレルメーカー」へ—」(『福島大学地域創造』16 巻 2 号、福島大学地域創造支援センター)
- 栖原暁 (2010) 「特集 日本文学と外国人：留学生の隠れた才能発掘し、新たな日本文学の可能性を広げる「留学生文学賞」」(『国際人流財団法人入管協会』)
- 齊金英 (2011) 「楊逸「ワンちゃん」の〈逃避行〉：越境願望から痛みへの共感へ」(『国文』116 号、お茶の水女子大学国語国文学会)
- 武田里子 (2009) 「結婚移民女性の適応・受容過程と農村の社会文化変容」(『村落社会研究ジャーナル』15 巻 2 号、日本村落研究学会)
- 田村景子 (2010) 「働くという生への応援歌—楊逸『ワンちゃん』をめぐって」(『国文学解釈と鑑賞』第 75 巻 4 号、至文堂)
- 丁貴連 (2018) 「多文化社会を先取りする文学」(宇都宮大学国際学部編『多文化共生をどう捉えるか』 下野新聞新書)
- 陳晨 (2016) 「楊逸の『ワンちゃん』を読む：孤独を拾い上げて、「ワンちゃん」に向かう」(『名古屋大学文学部研究論集』62 号、名古屋大学文学部)

- 星野智幸 (2016) 「解説 移民の子どもたちの凱歌」(温又柔『来福の家』 白水社)
- 李正姫・田中共子 (2010) 「在日コリアン二世・三世の二文化環境への態度とメンタルヘルス (1) —文化的アイデンティティの自己認識に関する面接調査—1」(『岡山大学岡山大学院社会文化科学研究科紀要』第 30 号、岡山大学)
- 崔洋一 (1994) 「書き下ろしエッセイ「カメラを持ったアジアの子」」(『月はどっちに出ている〜崔洋一の世界』 日本テレビ)
- 崔洋一他 (1993) 「鼎談 vs 梁石日 vs 鄭義信「在日同胞に告ぐ」」(『マルコポーロ』9 月号、文藝春秋)
- 崔洋一・関川夏央 (1993) 「対談 vs 関川夏央「これは東京レジデントの映画だ」」(『キネマ旬報』11 月上旬号、キネマ旬報社)
- 崔洋一・鄭義信 (1993) 「対談 vs 鄭義信「ちょっとズレて吉本風」」(『イメージフォーラム』12 月号、ダゲレオ社)
- 崔洋一・山根貞男 (1993) 「対談 vs 山根貞男「映画と差別と在日と」」(『現代』11 月号、講談社)
- 崔洋一・柳美里 (1994) 「対談 vs 柳美里「ここではないところの旅へ」」(『プリンツ 21』夏号、プリンツ 21)

글로벌시대의 뉴커머 이민문학

— 최양일 감독 『달은 어디에 떠 있는가』 (1993) 를 중심으로 —

정 귀련 · 스즈키 아리사

요약

본 논문에서는 일본사회에 거주하는 재일외국인, 특히 뉴커머의 모습을 통해 일본의 다문화 사회를 살펴 보았다.

먼저 뉴커머의 이민문학¹을 논하기 전에, 재일조선인 1세 작가 양석일 (梁石日) 의 『택시 광조곡 (タクシー狂躁曲)』 (1987) 을 리메이크한 최양일 감독의 영화 『달은 어디에 떠 있는가 (月はどっちに出ている)』 (1993) 에 주목하여, 본 작품의 영향을 살펴보았다. 원작과는 달리 영화에서는 1980년대 후반부터 급증한 뉴커머 등장인물을 새롭게 등장시킴으로써 다민족·다문화사회의 도래를 예고하였다. 더불어 그동안 재일조선인 문학이나 커뮤니티에서는 볼 수 없었던 새로운 시대의 외국인 모습을 비추었다. 이러한 묘사가 관객에게 큰 충격을 안겨 주었지만, 그 후에 등장하는 뉴커머 작가에 의한 이민문학도 최양일의 영화처럼 글로벌시대의 일본사회를 그리고 있다.

중국 출신 작가 양이 (楊逸) 는 『왕짱 (ワンちゃん)』 (2008) 을 통해서, 당시 거의 알려지지 않았던 국제결혼을 한 여성, 특히 중국인 여성들의 삶을 밝혔다. 대만출신 작가 온유주 (溫又柔) 의 「복이 오는 집 (來福の家)」 (2011) 에서는 작가 본인이 외국인 가정의 자녀로서 일본에서 자란 경험을 토대로 외국인 가정의 자녀들이 겪는 고난을 밝혀, 오늘날의 외국인 자녀교육 문제를 부각시켰다. 이란 출신 작가 시린·네자마피는 2007년에 발표한 『살람 (サラム)』 에서 외국인 유학생 시점을 통해서 본 난민문제를 다뤘다. 특히 이 작품에는, 일본의 난민의 실태를 드러내는 동시에 그들을 돕는 일본인들도 등장시켜, 다문화 사회를 함께 살아가려는 사람들의 일상이 제시되었다.

이와 같이 일본의 이민문학은 이주한 곳에서 조국을 그리워하거나, 한 개인의 이국생활 경험담을 넘어 일본사회가 국제화되어 다민족 공생, 다문화 공생 사회를 살아가는 구성원으로서의 외국인의 일상을 그려냈다는 점에 있어서 새로운 이민문학이라 할 수 있겠다.

안타깝게도 본 논문에서 다룬 작품 이후 이민문학은 별로 나오지 않고 있으며, 그 원인은 이주작가들이 그린 현실을 외면해 왔던 사회에 있다고 볼 수 있다. 「다문화공생」을 목표로 하는 지금이야말로 이민문학을 다시 읽을 필요가 있다고 본다.

(2023年6月1日受理)

¹ 이민문학은 이산문학, 디아스포라 문학 등 이주자의 문학을 통칭하는 용어으로써 본 논문에서는 이민문학 (越境文学) 을 사용했다.